＜ 巻 頭 言 ＞

我々ND9期生は2回生のとき歌集を作り，卒業時に記念文集を発刊した。

そして，文集の題字『百舌鳥』は光野先生に，表紙を飾る「百舌鳥」の絵は六島先生ご令室に，それぞれご高配を賜わった。結果として、100 頁に亘る立派な冊子となった。

この文集では，12 名の先生方からご寄稿を頂き，32 名のクラスメートがそれぞれ随想を執筆してくれた。その中には，いまは亡き増井君，伊藤（泰）君，浅田君の懐かしい一筆もある（表題一覧は 29 頁を参照頂きたい。）また，11 項目に亘るアンケートには，クラスメート 50 名のうち 44 名が回答している。

編集は波多野君が中心となって行われ，福田君，本田君が尽力された。印刷には津田君の労苦を多とすると後記にある。そして最後に，“三年に一度でも良い，『百舌鳥』続刊を発行したいものだ”，とのコメントがあった。それから幾星霜，遂に今日までこの願望は一度も実現が叶わなかった。

さて，昨年 10 月，箱根で ND9 同期会が開催された直後のことである。卒業後 50 周年となる記念すべき 2011 年に開催予定の ND9 同期会幹事をお願いすることになった宮浦君と川阪君に対して，谷口君から『卒後 50 周年記念文集』を発刊してはどうか，との提案が行われた。ご存知のように，我々は大学進学率がまだ一桁というエリート教育時代に学生生活を過ごしている。従って，卒業後もそれぞれの分野で大いに活躍し，一人ひとりが後世に残るような様々な物語をこれまでに多く経験している。これを後輩のために形に残したいとの強い希望もあったようだ。

このような提案を受けて，直ちに宮浦，川阪両君から賛意が表され，年明けて在阪のクラスメートが集い，50 周年 ND9 同期会の開催企画と文集発行について話し合ってくれた。その結果，文章を書くことにアレルギーがある人が結構多いことが明らかとなったが,同時に文集発行には大方の賛同を得たとの連絡を頂いた。こうして本格的に，提案者の谷口君が中心となって宮浦君，川阪君と共に文集編集案が練られ，小生もこれに協力させて頂くことになった。

以後，発行可能日を踏まえて設定された 6 月 11 日の原稿締切日を迎え，谷口君，宮浦君，川阪君それぞれの懸命なる働きかけの甲斐あって，どうやら発行できるまでに辿り着くことが出来た。編集 3 人のご努力に深甚の敬意を表したい。

最後に，この文集がいまは亡きクラスメートである　浅田，伊藤（泰），伊藤（芳），内山（旧姓・伴），増井，矢島各君の霊を慰める一助となることを心から願い，同時に，この文集を肴に本年 11 月 5 日・6 日開催の 50 周年 ND9 同期会が，母校を舞台として大いに盛り上がることを期待している。

文責：　田崎　三郎